



新編 古今圖書集成

^ 5
6529



三石清履著修訂古今小集
五條舟入半後編二編三編
中一石清履著修訂古今小集
一
一
一

難くもゆるしぬる指折りの能
本生或はるるてのち〜 甘茶喰
降降雲雪之谷さゆ小茶本はるる
子入くるまののちや物見和
喜風のいらぬ家や世門の事
は作と多録

久音伝

東京深川中佐野町 小築庵春樹
西京東山双林寺中 芭蕉堂良大
日活西成所内村 洋水園首余
名古本町目 竹林居之意

85
6529

Answered with love
The name of the place is
The name of the place is
The name of the place is
The name of the place is
The name of the place is



名はたしなむと愛
と名も竹林居士と稱し
志人たる芭蕉翁も流れて
て能く深く心とあり侍ら
らぬ諸風子の毒もあは
あはれと母とあり侍ら



0/0186021636

く名所集とあむ影りる
其ち―あまをせらるる―か
とも已れ素らり叢のあつる
窓乃雪よ―あまを井乃桂よい
と―けむの源く―か
ともあまのあひとと云よのか



もつもつて那―年―

あまらけくあつものこの年の年

かのえ年乃名を無月

小倉正四位長季朝臣

竹堂志とん



昨孝子

美由やと親を垣より背の伸し

晴るる露の如く少梅晴乃定

心もよめて舟へ入世は行船やん

燕居のゆかへ皆干し縮こ

幕とておを仕申の月の秋

清原みかきくす御乃御鳥

子 致

三 意

樗 雲

敬 致

堂 致



明の事始りては、猶も控へたり

書

を、一、色、奇、と、讀、み

意

清い、三、の、ま、か、ら、る、ゆ、ゑ、あ、ら、ま、り、致

書

引、き、ま、り、ぬ、裾、の、広、く

致

女子、お、の、こ、情、ま、さ、き、の、こ、も、い

意

情、ま、さ、き、は、を、利、七、年、役

書

明、の、片、お、か、ま、る、ゆ、ゑ、あ、ら、ま、り、の、月

致

春、ま、さ、き、は、ま、り、お、か、ま、る、ゆ、ゑ、あ、ら、ま、り、の、あ、と

書

是、ま、り、を、控、へ、り、と、流、火、の、魚

書

袋、町、の、ま、り、を、控、へ、り、と

意

角、移、り、か、け、流、る、ま、り、の、枝

書

枝、の、ま、り、を、控、へ、り、と

致

七夕や野に水あそびは花を
漁

きくはる月を梅の海川
之意

とよのふらふらと寝て
芥

けあしおをぬる待
藤

きくはる月を梅の海川
意

けあしおをぬる待
花

雨をうきうきと
藤

汐干は浪の初
意

出づるはる月を梅の海川
花

けあしおをぬる待
藤

とよのふらふらと寝て
意

けあしおをぬる待
花

とよのふらふらと寝て
藤

けあしおをぬる待
意

折少り 葉よりあるを精

建層 葉よりあるを精

ちりく 葉よりあるを精

葉よりあるを精

あちちと 押さるる葉の練

葉よりあるを精

版 押さるる葉の中

葉よりあるを精

有

有

有

有

有

有

有

有

葉よりあるを精

葉よりあるを精

柳 葉よりあるを精

葉よりあるを精

葉 葉よりあるを精

葉よりあるを精

葉 葉よりあるを精

葉よりあるを精

有

有

有

有

有

有

有

有

多柳子とありて浦の果えり
 親仁婦人の親仁を
 常くと善く嗜む所の折
 其丸もむいさりとありまなり
 柳ハまよふをいふなり
 藤 意 彦 彦 彦

名月の空も花も花も
 ち〜庵よ桐の一葉も花捨りて
 陶 竈ハ新しきあり
 つく移人と山と成り比なす
 町も花もいふなり
 梅 裡 意 彦 彦 彦 彦

致菓子て昔の形をゆく事奇

しふきと縁ハかきりて形

又の秋紅ゆきとさき別きて

坂のさしやうもたふぬ者

きりやふ木田の柳子さう歌

かー車まて油しそかく

あきふち色紅涼き物りすき

川手ありともさう月の奇

程

意

程

意

程

意

程

意

杖篠の雉もさうれはよ迫至

あふり戻り能皆相續し

滑らんさきふもむのなほ

おそ知る際の新さる風

おそあを抱膚さうさう九

下戸きけ細の海さう水

海人さうさう人柳ちかあめ

侶うさうさう小庫さうの建

程

意

程

意

左

程

意

程

海の音 網罟のうゑも歩み

ひより水外の波さらしく

いふ志も ちかぬも ちかぬの操也

水も 鏡よ 袖振る 水風

おとすまの 叫ぶ 志も 望の果は

ねむる 夢よ 袖を けり 水

月影も きののまぬ 菊の 露 燈

根岸 一より 風は 舟の 深

定

程

定

程

定

程

定

程

ぬり 踏ま ちかしく 素 端形

かき くれ けさき ちかしく あり

帯 とも ちかぬ ちかぬ ちかぬ

帯 ちかぬ けさき ちかぬ ちかぬ

きり ちかぬ 柳 ちかぬ ちかぬ ちかぬ

ちかぬ ちかぬ ちかぬ ちかぬ ちかぬ

定

程

定

程

定

程

賑やのれ月夜とありぬ梅の花

深泉

言さば鳥とや道一春

三意

子雀のほゑんまゝ椽かしく

芥子

もくもくハききぬ傘

翠

若ハ船よ積を素人を待まうり

三意

扇あけ世を皆くらくむく

花

市や又ハ花を破ての陣りし

翠

野くらちくらと店の世話お

三意

紫お来る度よまゝ馬の宿

花

ゆきかきぬ雪景ありあり

翠

まの賣物おも吹ちる夕あし

三意

隣りの孫を待てさや

花

廊下もあし何事と新世帯

翠

ほく星さきとハあんまりあは

三意

一城の如くしては正月の雪

彼岸をかけた一京の滞留

花書持おさうと今秋うら

いさういさうおまをいり際

とれんてゑの難おのり笑顔うて

飲ま下ふもまぬ 是

わけの如きけしは雪の難しき

とやうやうなちの来さうれみ

雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪

流るるる向ふ行燈の岸を九

町を去る風根越ふりり

田舎の待望しるは障り外て

まの如く見れば夏をいさ

胸掛の拂うてゑる門の石

あささうりほと 長き杖

月をばやう散るふおまらら

ゆふも角さるる光る白雲

雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪

久き近きやこれ幸まぬ
 着くなり合相籠うし行
 縄つけ引く大の流きり
 背たを廻りもまきり
 まきり流きりまきり
 墨まきりとまきり

空 空 空 空 空

草花やうきまきり
 雪もやうき初日の色
 石榭もはなもあし市
 木のまきりまきり
 さくらもまきりまきり
 枕もまきりまきり
 酒飲も神もまきり

春 甘 華 氷 美 桂 芽
 湖 海 兒 榭 花 女 裁

朝白のやちをききあめ風のき方
 さえやきき人のこころよきし雨
 連るきし物解し合ひふしう敷
 換扱ふ扇をきき玉色中へん
 巾のうしろき、扇うし新のう白
 厚敷ふきを故きし物きりり
 中へ新のち梅うてりり、さききりり
 雪うしや、軍ハ新のうしききりり

大花 田楽 宇山 梅年 菅凡 如白 三雄 見外

海草をききあめ風のき方
 新のちのむしききりり、さききりり
 坂河うしききりり、さききりり
 兼るきし物解し合ひふしう敷
 水仙のやちをききあめ風のき方
 人多ききりり、さききりり
 庭をききりり、さききりり
 敷うしききりり、さききりり

知美 赤岬 漢外 三水 千畝 完結 五休 沙山

軍人志まき修め望や少相成 為山

江の流るるをし 上や 郭 云 成 源

西月やまき際より小際より 春

啼き声 梅香をききこたり 里井

よりあーのわきまきのみた 上 染

梅のまき人きき 二 高

梅かきよ方根出るよ小牧系 越 史

三枝や 先りきき 出 梅のまき 小 雪

先くまよ雪垣より 重 貞

まき 高 山

い 行 其 源

ま 水 南

秋 春 山

流るる 尋 山

社よりよしの岩崎——堀の宵 本年
 名月や風を先くそかきかきて 習静
 降し雨や吹きよそ言はぬはら 米室
 みのもはつしそ有しつ——表 地登
 炭ありまや夏玉川のまはら きのき
 此よりまはら色を定めを秋と—— 雪村
 ちこくまはらやまをさかて此の相 泉悦
 お徳——まはらにさかきかきかき 為一

声はきき水うきき乃ほく田嶋くれ 美草
 三日月を足付——人夜二王立 源家
 多木のあきさきさきかきかき 可石
 秋をこの降し雨——ききかきかき 葉石
 草乃折し後志実の入瓢う程 九如
 名月や——いそげの水と大井川 聖島
 竹こくまはら——や蒸のう——か 清彦
 よろこくまはら——門乃古松岩 孝復

清き水松林のあし子水月
 神玉のきく花のしらけの
 雀おろし流るる水
 あしきまの流るる水
 おまの果るる水
 星のまの果るる水
 村のまの果るる水
 梓桐のまの果るる水

杜水
 水音
 尺波
 新水
 古心
 十湖
 松庭
 新堂

うきうきの水月
 とうまの物像や岩像
 水鏡のや影投出に花
 空の鳥やあつと思ふ二三日
 水鏡のや影投出に花
 きくまのきくまのきくま
 秋風の吹く水
 とうまのきくまのきくま

曉嵐
 佳交
 帰一
 知花
 蒼岩
 壺春
 壺春
 嵐集

小山のけしき見し新や尾正
尾正

初しと進時意廣く可晴くあり
蓮字

半歌ふくく田代ある處く那
杜堂

川流や暑き子遊し
半桂

若ふくきれき此ふおの有揚くれ
潮風

焚れく漕り舟紅城きふ
言之

御座るを少き子屋乃花小雨
雲湖

うらや暮きもらひの鏡子
波文

響妙のうらうらと籠くほん哉
美濃 雲牛

おとくく屋敷りてんく牡丹哉
蓮庵

錦のなまかへと申く籠雲の人
碧瓦

やと向くかゝるの意方て有るなり
石高

梅打て行や月夜のお糸ふ
竹菫

今宵をいづる月夜多うり門まへに 加が 雲唄

甲府中へて生きている 福 菫 柗葉

よへづり 柳 柳 林 林や浜か 大 晴江

朝うづる月夜 柗 柗や田の米 結 結草

まへへと 梅 梅 里 里の月夜 越 越中 雪 雪報

さくら 花 花 中 中 雪 雪 報 報

さくら 花 花 中 中 雪 雪 報 報

さくら 花 花 中 中 雪 雪 報 報

さくら 花 花 中 中 雪 雪 報 報

さくら 花 花 中 中 雪 雪 報 報

さくら 花 花 中 中 雪 雪 報 報

さくら 花 花 中 中 雪 雪 報 報

さくら 花 花 中 中 雪 雪 報 報

さくら 花 花 中 中 雪 雪 報 報

さくら 花 花 中 中 雪 雪 報 報

さくら 花 花 中 中 雪 雪 報 報

さくら 花 花 中 中 雪 雪 報 報

さくら 花 花 中 中 雪 雪 報 報

さくら 花 花 中 中 雪 雪 報 報

さくら 花 花 中 中 雪 雪 報 報

さくら 花 花 中 中 雪 雪 報 報

さくら 花 花 中 中 雪 雪 報 報

さくら 花 花 中 中 雪 雪 報 報

所梅や室の南のまをまはりの後 七時 山 敵
 ちのちのちのちのちのちのちのち 梅 連 梅
 片岸をてちのちのちのちのちのち 吾 雲
 湯あつりや室の南のまをまはりの後 臣 臣
 後をちのちのちのちのちのちのち 巧 高 溪
 明易よおのちのちのちのちのち 逸 逸 少
 白梅や室の南のまをまはりの後 介 介 居
 水系は梅の室の南のまをまはりの後 三 外

言明や室の南のまをまはりの後 藍 溪
 その南のまをまはりの後 相 林
 梅の南のまをまはりの後 大和 水 石
 尺の南のまをまはりの後 之 隣
 新起の南のまをまはりの後 法 法
 強の南のまをまはりの後 可 交
 きりりと梅の南のまをまはりの後 字 尺

くちやゆきて花をゆねと集りたり
たしやゆきて花をゆねと集りたり
かき凍や新ハス冬を月明り
梅も実なり冬を月明り
秋すしし冬を月明り
けしき初あけし
わきし冬を月明り

瑞中
李歌
玉瓶
麩白
梅女
兼江
桂六
葛居

たしやゆきて花をゆねと集りたり
一ハやゆきて花をゆねと集りたり
草むすむ花をゆねと集りたり
出と花をゆねと集りたり
入りて花をゆねと集りたり
ほりり花をゆねと集りたり
台亦花をゆねと集りたり

秋
杜鵑
秋水
良大
草志
碑山
高若

近き日は表のさくら、磯の那
 木うらや霧裏の来り、
 吹さわくお霧のうらや、お月
 黄き子、おき、お供、おき、
 美、おき、おき、おき、おき、
 起、おき、おき、おき、おき、
 三、おき、おき、おき、おき、
 隣、おき、おき、おき、おき、

まる、おき、おき、おき、おき、
 梅、おき、おき、おき、おき、
 おき、おき、おき、おき、おき、
 おき、おき、おき、おき、おき、
 と、おき、おき、おき、おき、
 おき、おき、おき、おき、おき、
 おき、おき、おき、おき、おき、
 おき、おき、おき、おき、おき、
 おき、おき、おき、おき、おき、

言雄

赤浦

桃下

吹雪

梅岩

赤梅

赤魚

芥子

孤杉

油藤

淡岸

於山

大柳

梅岡

九起

安丸

その月かきしるるもあやふし
 梅敷
 人まじりては物哉
 玉節
 か茂川やけしきる布衣を言し
 竹書子
 燕掃けつるも船を海へ舟
 子敬
 立掃るや衣を脱しるる山の麓
 橋雪
 起やまきし林と来りり相一葉
 春雪
 空在鳴りを留る橋の在りけ
 梨高
 秋まや新の日は新乃と年相
 文海

そのあふ月とまじりたる梅の意
 旭春
 此亦清の意まで又ゆる天を言哉
 然池

鈴鹿山

雪を積りて修や美をけりて
 哉梨
 今も越へ山新を掃りて
 千條
 水多きを多しよの舟の葉を
 梨高
 春も此柳子よ来りて餅の音
 芥子

さよふ夜うきうきと重しつとまづ

近江 乙也

香晴もさや一日お入月が那

何男 困美

新修も中つわし一月の門

涼中

限りある林もさし寸庭の草

柳圃

山に入居られ身や鳴子鳥

鏡雲

神皇の森もさしとまづ

其悠

身は下草ふなりぬ若乃菊

果蕉

廿二

いほのもおやうと思つた初何

尾道 土前

むきもさし庭もつとまづ

甫

ちまうし一日お入月が那

三楓

家ありぬき晴れもさし

素陽

狩ありぬきさしお入月が那

梅阿

舟の舟もさしお入月が那

北史

妙りけえ机おやう

固亭

更りやぬきもさしお入月が那

可美

嘉川舟や波に引く松ほり
り杖や杖をぬきて寝る
ふまへのあそびを柳に
あふふあそびをやむ
船はよ河をさすか
舟をさすか
松のや

嘉川
舟
松
杖
寝
柳
舟
舟
松
舟

嘉川舟や波に引く松ほり

石より波をさすか
舟はよ河をさすか
舟をさすか
舟をさすか
舟をさすか
舟をさすか
舟をさすか
舟をさすか
舟をさすか
舟をさすか
舟をさすか

石
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟

降しうらをおりてあはきん哉

梅石

地こもみむらありきし初給

素石

寺ぬりてまは地を踏よあは

素石

初雪やうきまへまると志りし

湯磨

十月やまのうき山日和初

梅谷

静かなる静候きききき

新世は静候ぬよまみえて

晋子う一言をききき

うきまへまると志りし

羽水

梅あはきりし木の紅葉あり山の池

一史

ちきよのとむら梅ぬら妙り寺

芝橋

まもり梅ぬらきききき

梅岐

菊あはきりし木の紅葉あり山の池

分史

そらまへもあはきりし

求古

大空のみよりあはきりし

玄甫

鍵もももひよりあはきりし

秀石

恨あはきりし木の紅葉あり

子菜

藤花の影をほらきてまは風
 波音もなく海をてまの月
 梅一本存ふきしとて白りり
 きのゆくをばさるやまのふ
 夕山や 鐘子のほろよまのこ
 畑とちねきゆやれり中し
 明とすも星はさうりやるふ
 夢ありて夢の啼し 枯葉集
 芳山 竹路 晴圃 為重 冬白

一軒をきてまらるるの漸都
 何となくまらるるはつとまらる
 ま風よおらるるはつとまらる
 旅りしやまを降しの暮後石
 少りむらハつとまらるるまら
 梅白し 伊吹おほしをうけまら
 雪少あつた影のむらつた
 けりしやあつた船一揃きのみ
 派翠 士芳 朴富 如向 ふさ如 如儼 三来 詠雪

柳條を一年に於ける門の言
 雲々の日意よりとてなむはる
 雲々のやまをくふはるまを
 障り出りし日の言からや秋の言
 袴帯や火のまきを親くち
 人々の小室のほろけり子の日哉
 巾着を紅湯のまをくふ小舟の丸
 元日の旭のほろけりや秋の言

永照
 五階
 雲南
 孤危
 杏青
 深水
 而遊
 曆明

風をくふく根をくふく梅の言
 とめくふくく樹ありまの月
 柳移井の湯のほろけりや秋の言
 名月や袴のまをくふ水まを
 藤入のまをくふくはるまを
 さしをくふくくはるまを
 雲の星やくはるまを梅の言
 花のまをくふくくはるまを

奇功
 月影
 可憐
 追憶
 高松
 有秋
 那友
 那意

春の草よきすもさすは少い哉
 草一々水の光りや秋の風
 きのうの夕やち子の船通ひ
 夕風やとぬるえを船尾に揺
 櫓の音やあつたての氷のうら
 只そとくもあまの磯を月夜に
 残る夕やた乃共は船中へけ
 るるのよきとあふに在るは
 左塚
 甲川
 如水
 車友
 把山
 又甫
 栗原
 逸志

馬の年まほさくへ向ふ重なり
 雪の如く水舟人の居るより
 吹く風よ内なるまやに中へ才
 ゆきと換へし垣も陽をぬきしら
 さくもりともあそびてゆきまのゆき
 伸もよほそ屋のそとを枝のれ
 浦傳ひ行く柳の春の歌
 うはらうと草ととるる花のや
 武貴
 節菱
 弁喜
 可然
 一富
 岸水
 三晚
 梅裡

古き心まのしるるを此の端目西から
さるる文字の端者乃抄撰とある典し
相とくし編ありた免はくまの事
廣く世よ海人書を叙すやん

花海時先

はるるり年の春

三巻

古林



百三冊
古版毛欠本毛有り

